

平成 26 年度 財団せせらぎ 助成金使用報告書

所属	京都大学大学院	職名	博士後期課程	助成金額	300,000 円
氏名	井岡 詩子	メール アドレス	utako_ioka22@yahoo.co.jp		
研究課題（申請書に記入した内容を記入すること。）					
ジョルジュ・バタイユにおける「生の追求」に関する研究——幼児性・悪・窮乏のモチーフをめぐって——					
助成金使用実績の概要（日本語で記入すること。図・グラフ等の記載は必須ではない。）					
<p>ジョルジュ・バタイユは、性愛文学や哲学的論考、美術および文芸批評、当時の文化人類学的アプローチに基づいたエロティシズム論や宗教論など、多岐にわたる執筆活動を展開した。散漫にも映るかれの活動は、実のところ、人間としての生を追い求め、それを享受することの重要性を主張し、その様相を提示することに捧げられていたと考えられる。本研究の目的は、そのような「生の追求」の様相を示すモチーフである幼児性、悪、そして窮乏の関連性を解き明かすことであった。これらのモチーフは、第二次世界大戦中から晩年にかけての著作に認められるが、悪のモチーフに比べると、幼児性および窮乏のモチーフは数が少なく、必ずしも統一された観点から用いられているわけではない。これまでおこなってきた各モチーフの個別的な研究を前提に、本研究では、おもに悪と幼児性が同時に用いられる箇所を調査、検討の対象とすることとした。</p> <p>パリにて、資料、著書の収集および読解をおこなった。それらを通してあきらかになったことの概要を以下に記す。悪と幼児性のモチーフが同時にあらわれるテキストとしては、『ジル・ド・レ論』が挙げられる。ジル・ド・レは、15 世紀フランスの貴族で、幼い子どもの誘拐と凌辱、殺害をおこなった悪名高い人物であり、バタイユの作品における悪のモチーフのひとつとみなされる。バタイユがジルに見出す幼児性（幼児的、子どもらしいとされる特徴）は大きく四つに分類することができる。大人や理性の側から見たときに怪物性として規定される幼児性、無秩序や衝動に特徴づけられる幼児性、古代的あるいは野蛮人的な振る舞いに認められる幼児性、特権階級者の遊びを体現する者としての幼児性である。この内、怪物性としての幼児性に、バタイユの伝記を記したミシェル・シュリヤが着目している。シュリヤによれば、バタイユが『ジル・ド・レ論』に示した、残酷な振る舞いや残酷な無邪気さとしてあらわれる幼児的な怪物性は、文学とエロティシズムが共有する幼児性である。この見立てにしたがえば、バタイユが近代以降の人間のな生のモデルとする文学者や芸術家の幼児性と悪を中世において先取りしていたのがジルであるとみなし得る。だが、バタイユにとって近代以降の文学者、芸術家が、近代という時代を拓いた人物あるいはヘーゲル的な人間の意識の歴史の先駆者であることに鑑みれば、ジルの幼児性、すなわち古代的あるいは野蛮人的で、(近代では廃止された) 特権階級者に属する幼児性を、文学のそれと同一視することはできない。また、バタイユがピエール・デュメイエのインタビューに応じて強調した文学の幼児性とは、怪物性よりもむしろ、両親をまえに叱られるのではないかと怯える子どものすがたに象徴されるものであった。両者の根本的な差異は、みずからの幼児性や悪にたいする認識にあると考えられる。つまり、ジルが無自覚に幼児的なままであったのにたいし、バタイユが評価する文学者や芸術家は、かつてみずからがそうであったような幼児性へ意識的に回帰するのである。ただし、ジュネの例に見られるように、意識的に回帰された幼児性や悪が、それ自体以外に目的をもつことをバタイユは認めていない。そのため、大人に象徴される理性や合理性の社会において、幼児性や悪は窮乏に帰結する。一見同じモチーフをまとめたジルと近代以降の文学者、芸術家を比較することで、近代以降の人間の在り方としてバタイユが評価するのは「意識的に回帰された」幼児性や悪であること、そして、ジルのようないわばナイヴな幼児性や悪は、中世の社会制度においてこそ特権階級者に許されたものであったが、近代以降の人間のな生の在り方としては引き継がれ得なかったことが浮き彫りにされた。</p>					
助成金を使用した成果に関する発表（インターネットに公表されている場合は URL を記載すること。）					
発表者氏名 (著者・講演者)	発表課題名 (著書名・演題)	発表学術誌名 (著書発行所・講演学会)	学術誌発行年月 (著書発行年月・講演年月)		